

## ジョナサン・エドワーズの終末論

村上良夫\*

The Eschatology of Jonathan Edwards

Yoshio Murakami \*

*Received October 29, 2002*

### はじめに

18世紀米国における代表的思想家・文筆家として、また独立革命以前のアメリカ文化を代表する人物として、しばしばベンジャミン・フランクリンと並び称されるのがジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards 1703-58) である<sup>(1)</sup>。1957年からの全集出版 (イエール大学出版会) が進むにつれ、彼の巨大な全体像がようやく少しずつ明らかになりつつあるが、それでも本格的な全貌解明はまだこれからとされる。しかし、いずれにしても彼の“終末論”が彼の業績の中できわめて重要な位置を占めることに関しては、研究者の間でほとんど異論はない。「米国において、黙示録の最も偉大な芸術家は、もちろんジョナサン・エドワーズ」とペリー・ミラーはつとに指摘している<sup>(2)</sup>。また、いわゆる「後千年期説 (後千年王国説)」キリスト再臨の前に千年期がある、つまり千年期後にキリストが再臨する、とする説を、米国において主唱し確立したのもエドワーズであり<sup>(3)</sup>、それゆえ進歩・成長・向上といったアメリカの楽天主義的伝統に多大な影響を及ぼしたとされるのである<sup>(4)</sup>。さらに、1977年、それまで知られていなかったエドワーズの「黙示録ノート」がはじめて公刊 (イエール版全集・第5巻収録)<sup>(5)</sup> されて以来、黙示録を中心とする“終末論”が彼の最大関心事であったことは、いっそう疑問の余地のないものとなった<sup>(6)</sup>。

さてそこで本稿は、このように近年ますます注目されているジョナサン・エドワーズの“終末論”を、3つの角度から考察する。“なぜ”終末論なのか、“どのような”終末論なのか、そして、彼の終末論の“影響”である。

### 背景：なぜ、終末論か？

ジョナサン・エドワーズは彼の「黙示録ノート」を1723年春に書き始める。そして最後の記載『コネティカット・ガゼット』紙からの抜粋は1757年12月10日付けである<sup>(7)</sup>。35

---

\* 外国語学部  
Faculty of Foreign Languages

年にわたって彼は「黙示録ノート」を書き続けたわけで、イェール版の編者ステファン・J・ステインの言う通り、「成人後のほぼ全生涯にわたって」書き続けたと言える<sup>(8)</sup>。さらに今日、黙示録に基づく66の説教が彼の文書の中に残されている<sup>(9)</sup>。また、『贖いの御業の歴史』(A History of the Work of Redemption. 1739年になされた一連の説教。1774年に死後出版)、『ニューイングランドにおける信仰復興に関する若干の考察』(Some Thoughts Concerning the Revival in New England. 1742年)、『特別な祈りにおいて神の民の明らかな一致と目に見える結合を促すための慎ましき試み』(An Humble Attempt to Promote Explicit Agreement and Visible Union of God's People in Extraordinary Prayer. 1748年)など、いくつもの主要著書の中で彼が終末論的思想を展開していることは周知の通りである<sup>(10)</sup>。

さてそれではエドワーズが、このように終末論に対する深い関心を一貫して持ち続けたのはなぜであろうか。いくつかの理由が考えられる。

まず第一に、英米プロテスタンティズムの黙示録的伝統とも言うべきものがある。つまり、ステインの指摘するごとく、宗教改革以後の英国で発展した黙示録的伝統<sup>(11)</sup>。そして特に、ピューリタン革命と千年王国論の密接なつながりに見られる終末思想の伝統。が、エドワーズの「黙示録ノート」の直接的背景をなしていることは確かである<sup>(12)</sup>。エドワーズの「後千年期説」にしても、イギリスの神学者、ダニエル・ホイットビー(Daniel Whitby 1638-1726)やモーゼズ・ローマン(Moses Lowman 1680-1752)らの著作から大きな影響を受けていることはよく知られている<sup>(13)</sup>。そして実際、ニューイングランドには終末論や予型論の、深く根差した伝統があった<sup>(14)</sup>。したがって、エドワーズの終末論志向は何も特別なものではなかったともいえる。それが当時の一般的風潮であり、彼はまさしく時代の子であったのである。

しかしそれだけではない。第二に、終末論はエドワーズの信仰の当然の帰結であった。つまり、神の活動的主権を確信するがゆえにエドワーズは、神の“大いなる計画”を認めずにはいられないのである。個々の魂を生まれ変わらせるキリストの恵みは、贖いの歴史においても力強く働く<sup>(15)</sup>。人の回心の必要性とそこに働く神の主権とを固く信じるエドワーズは、個人の救いから救済史全体へと視野を広げる。彼の思想は人間の罪深さと神の主権の至高性という二重の焦点を持つというジェームズ・P・マーチンの指摘は妥当である<sup>(16)</sup>。そして、人間の救いのための神の圧倒的な主権と摂理を微塵も疑わぬエドワーズは、神の国の最終的実現を確信せずにはおれなかった。神の主権と摂理への、尋常ならざる深い信頼が、彼をして終末的希望に熱中する者としたのではないかと考えられるのである。

さらに第三に、いわゆる「大覚醒」<sup>(17)</sup>と呼ばれる信仰復興運動(リバイバル)がエドワーズの終末論的信念を強めたということが挙げられる。ただ、ここで注意すべきは、大覚醒が彼の終末的希望を引き起こしたのではなく、それを強めたという点である。大覚醒以前から、すでに彼は終末論に強い関心を持ち、思索をめぐらし、黙示録ノートなどを書き綴っていた<sup>(18)</sup>。したがって大覚醒は彼の終末論の原因ではない。しかし彼の終末論を発展させたきわめて大きな要因であることは確かである。1734年から翌年にかけてのノーサンプトンにおけるリバイバルの際、エドワーズはこれを千年王国とは全く結びつけていない。そこに特別な終末的意義など認めていないのである<sup>(19)</sup>。ところが1740年の第二次リバイバルになると態度を変える。あとで見るように、彼は大覚醒を、千年王国がまもなく始まるしるしと解釈し、神の国の到来を強調するのである<sup>(20)</sup>。このように、大覚醒がエドワーズの終末思想を生んだのではないが、

しかしそれを強め発展させる役割を演じたことは間違いない。

以上、エドワーズの終末論の背景を概観した。当時一般の宗教的背景、エドワーズ自身の信念に基づくいわば個人的背景、そして大覚醒という特殊な時代背景が、彼の終末論形成に与って力あったと考えられる。それではそうした中で形造られた彼の終末論は、どのような特徴を持つものであったか。それを次に検討したい。

### 特徴：どのような終末論か？

エドワーズの終末論の諸特徴に関しては、さまざまな視点からのさまざまな解釈が可能であろうが、ここでは便宜上5つのカテゴリーに分けて考察する。

#### A. 救済史と個々人の魂との照応

贖いの働きの歴史は、魂の回心と完徳になぞらえることができる；魂の成長は救済史の縮図である。これがエドワーズの、歴史と終末についての基本的な考え方である。

福音の光が増し加わり、選ばれた教会が 最初の教会設立から世の終わりに至るまで 贖いの御業を推し進めていくさまは、同じ働き同じ光が個々の魂の中で 回心の時から完成され栄化に至るまで 続けられていくのと非常によく似ている<sup>(21)</sup>。

キリストの王国は魂の中に築かれつつある。同様に、世界的な主題に関わる偉大な事柄一般に関しても、墮落後の[贖いの御業の]始まりから世の終わりにおける完成に至るまで、働きが続けられつつあるのである<sup>(22)</sup>。

かくして、「小さな働きと大きな働きの間のこの分かつべからざる結びつき」<sup>(23)</sup>から、いくつかの系が生じる。

#### (1) 進歩の概念

魂が恵みのうちに成長していくように、救済史も前進的な事柄だとエドワーズは見る<sup>(24)</sup>。実際、彼は“progress”や“growth”という言葉を用い、大事などころでしばしば用いる<sup>(25)</sup>。キリストの王国は心の中に築かれ、完成に向けて前進していく。福音は全世界に伝えられ、地歩を固めていく。

終わりの時に神は当地に福音を送られた。そして今やキリスト教会がニューイングランドに、またアメリカの他の地域に、以前は全く異教の暗黒でしかなかったところに、かく設立されている。アメリカの広い地域が、今や聖書に満ち、少なくとも形式的には真の神とイエス・キリストへの礼拝に満ちている。長きにわたってキリストの名など聞かれることのなかったこの地域に<sup>(26)</sup>。

すべては神の支配のもとにあり、神の目的を前進させるために用いられる。科学技術も例外

ではない。

航海者の羅針盤は近年の発明であるが、これによって人は、以前は誰もあえて陸地から遠く離れて乗り出そうとはしなかった大海原へと出帆できるようになった。これは神が、教会の輝かしい時代に引き起こそうとなさっておられること、すなわち、人の子らが住むところはどこでも、いかに遠くても、福音を伝えるというそのことのために、摂理のうちに備えられたものと我々は見なしてよいであろう<sup>(27)</sup>。

エドワーズはまた、次のように強調する。

これ〔終末の偉大な出来事〕が、いわば一挙に引き起こされると考える必要は全然ない。それは聖書にある多くのことと矛盾することになる。聖書はこの偉大な出来事が、宗教の漸次的な進展によって起こると描いている。パン種が徐々に広がって、かたまり全体に行き渡るように。カラシが非常に小さい種から、しだいに大きな樹になっていくように（マタイ13章31 - 33節）<sup>(28)</sup>。

このように、事態はしだいに良くなっていくとエドワーズは確信していた<sup>(29)</sup>。

## （2）“摂理”の中心性

エドワーズの終末論の中核にあるのは、神の摂理に対する全幅の信頼である。彼にとって神は、摂理的配慮に満ちた信頼できるお方であり、聖書の預言の言葉は確かな道しるべであった<sup>(30)</sup>。彼のこうした信頼は神の主権に対する強い確信　全歴史は神の支配のもとにあるという確信に基づいている<sup>(31)</sup>。この意味で、エドワーズの最大関心事は千年期そのものではなく、歴史における神の行為の型にあったのではないか、というデイヴィッドソンの指摘は正しい<sup>(32)</sup>。言い換えると、千年期や終末論そのものがエドワーズの最終目標ではなくて、神の不思議な摂理を知ることこそ彼の究極の目標だったと考えられるのである。ステインは次のように要約する：

千年王国説は地上における勝利という将来の終末の時期に焦点を合わせる。これに対し、摂理は終末論の範囲を拡大し、過去・現在・未来をすべて視野に入れて神の経綸の中で捉え、地上と天上の両次元を共に考慮する。この大きな摂理という観点は、エドワーズが、各時代の、また現在の、戦う教会の運命に思いをこらしつつ、地上で予期され天上で究極的な成就を見る栄光の教会の輝きを、生涯を通しての関心事としていることから、明らかである<sup>(33)</sup>。

神の摂理を中心に据えるエドワーズのこうした考え方の根底には、神の“恵み”への信頼がある。パトリシア・ウイルソン・カストナーが強調するように、「ジョナサン・エドワーズが構築した体系においては、個人の救いも宇宙的救済も、恵みが決定要因となっている」、「エドワーズにとって、世界史の全目的は神の恵みの御業の実現にあった」と見ることができるので

ある<sup>(34)</sup>。そして、神の大いなる摂理というエドワーズの壮大なテーマも、そのもとをたどれば、彼自身の魂に働く神の恵みの実感というところから来ていると言えるであろう。

### (3) 柔軟さ

エドワーズは人間心理を熟知していた。

個々の魂における働きにはそれぞれに浮き沈みがある。光が明るく輝く時もあれば、暗い時もある。恵みが満ちあふれんばかりに思える時もあれば、それがすっかりしぼんでしまい、墮落にまみれてしまう時もある。そしてそれからまた恵みが息を吹き返す。しかし、概して恵みは増し加わっていく。栄光のうちに完成されるまで<sup>(35)</sup>。

同様に、歴史における神の贖いの業も浮き沈みを繰り返す、しかしやはりキリストの国の完成に向かって着実に前進していくと、エドワーズは主張する。ここで二つの点を押さえておこう。第一に、エドワーズは人間が弱いこと、あてにならぬことをよく知っていた。それゆえに救いの歴史に関しても、柔軟な見方ができたということである。彼は決して単細胞的な人間ではなかった。ジョン・F・ウィルソンもこう指摘する：

エドワーズは、千年王国における完成を目標として前進がなされつつあると信じていたが、しかしその過程を脈動的な、波のあるものと考えていた。聖霊の働きは一種の振動のように、前進と後退を繰り返させながら、しかし徐々に進んでいく<sup>(36)</sup>。

第二に、魂が揺れを繰り返しながらも成長していくように、救いの歴史も浮沈を繰り返しつつ前進していくが、しかし最終的な神の勝利については、エドワーズの確信は決して揺らぐことがなかった。「この偉大な御業は必ず達成される、君主らの権威によらず、賢者らの知恵によらず、ただ神の聖なる霊によって。ゼカリヤ4：6 - 7」<sup>(37)</sup>と彼は信じていた。救済史は揺れ動きつつ進んでいくが、人間の応答が道すじを決めるのではなく、すべては神の計画のうちにある<sup>(38)</sup>。それゆえにエドワーズは、救いの歴史の方向と完成に関し、基本的に楽観的だった<sup>(39)</sup>。

このようにエドワーズの終末論には、柔軟さと堅固さ、そして楽観的な側面も含まれていて興味深いものがある。

## B. 歴史の中での千年王国

エドワーズの終末論には宇宙的破滅が含まれていない。この歴史の中で、しかもキリストの再臨前に、悪魔の「目に見える王国」は滅ぼされると彼は信じていた<sup>(40)</sup>。つまり、エドワーズにあっては、「歴史の断絶」はない<sup>(41)</sup>。歴史の流れを断ち切るような宇宙的破局が訪れるのではなく、歴史の通常の流れの中で、悪は滅び、神の国が打ち立てられていくというのである。

この働きは福音宣教によって、そして通常の恵みによって、徐々になされていく。回心し

た者たちのうちには、他の人々の回心の助けとなる者もいる。神の霊が注がれる。まず器を起こすために、ついでそれらの器をより良いものにし、成功に至らせるために<sup>(42)</sup>。

このようにエドワーズによれば千年期は、いわば通常の歴史の延長上に来る。神による超自然的介入や宇宙的破局はない。千年期は、輝かしい時代は、歴史の枠内で、そして反キリストの滅びと共に始まると、エドワーズは一貫して主張する。

反キリストが打ち倒され、以前は反キリストの臣下であった諸国民が、真の宗教を奉ずるようになる。そして恐らくは、反キリストの残党と回教徒、異教徒が結合し打ち負かされる最後の大きい戦いによって [真の] 宗教が異教徒らの中に堂々と宣べ伝えられるであろう。この勝利は世界の、死人からのよみがえりであり、黙示録20章に告げられている第一の復活である。かくて千年王国が始まる<sup>(43)</sup>。

千年王国は、キリスト教の黄金時代は、この地上で、歴史の枠組みの中で、そして聖霊の力のうちに福音を宣べ伝えるという普通のやり方によって、達成されるとエドワーズは強調する<sup>(44)</sup>。歴史のあとにでも、歴史を超えてでもなく、歴史の中で千年王国の樹立 これは必然的に「楽観的歴史観」を生む<sup>(45)</sup>。カルヴィニズムの千年王国説から、天地の覆滅といったような17世紀的要素を取り除いたことが、エドワーズのおそらく最も顕著な功績ではないかとアラン・ハイマートが指摘する通りである<sup>(46)</sup>。あるいはマーチンの表現を借りれば、「宇宙的次元が純然たる歴史事件に取って代わられた」とも言えよう<sup>(47)</sup>。天地、宇宙という時空を超えた出来事から、具体的な「歴史」への転換、それも恐怖から希望への転換 それがエドワーズの終末論であった。この「楽観的終末論」<sup>(48)</sup>すなわち「後千年王国説」もまた、魂と歴史との相似性に関する彼の見解と深くかかわっていると見えよう。

### C. アメリカの役割

「エドワーズは聖書の中に、特に黙示的な章節の中に、アメリカを発見した」とバーコヴィッチは評する<sup>(49)</sup>。つまり、積義的な意味で、預言的な聖句をはっきりと米国に当てはめたのはエドワーズが最初だというのである。予型論的推論というニューイングランドの伝統<sup>(50)</sup>、そのニューイングランドでの大覚醒、そしてエドワーズ自身の綿密な聖書研究が、彼をしてそうした「発見」へと導くに至った：

かくも尋常ならざる驚くべき神の霊のわざは、聖書の中にあれほどたびたび予言されている神の栄光の御業 どんどん進行してついには人類世界を一新させるあの御業 の夜明け、もしくは少なくともその先ぶれではあるまいか。 神のこの偉大な御業の始まりは近いに違いない。そしてこのわざはアメリカで始まると考えてよい多くの理由がある<sup>(51)</sup>。

エドワーズは、イザヤ書60章9節を解釈して、「ここで『遠くの』『島々』とは、アメリカを指すとしか私には考えられない」<sup>(52)</sup>と述べ、さらにこう続ける：

この新世界 [ アメリカ ] が今や発見されたのは、おそらく、神の教会の新たな真に輝かしい状態がここで始まるためであり、神が新しい天と地を創造される時、ここで霊的な意味で新しい世界を始められるためであろう<sup>(53)</sup>。

そして「今アメリカで、特にニューイングランドで見られることは、この栄光の日の夜明けとなるであろう」<sup>(54)</sup>と彼は宣言するのである。

エドワーズが神の計画の中にアメリカの役割を“発見”したことには二重の意味があった。ひとつには、それはアメリカの自己確認の試みだったと言える。もうひとつには、それは大覚醒のしかるべき評価の試みであったと言えるのである。エドワーズはリバイバルを神の大計画という文脈の中で理解しようとする。そうすることによってリバイバルに重大な歴史的また終末的意義を与えるのである<sup>(55)</sup>。エドワーズにとって大覚醒は、ニューイングランドという特定の地域に注がれた神の恵みの顕現にほかならなかった。リバイバルは全的に神の行為であり、歴史の中でその目的を持つものであった<sup>(56)</sup>。要するにエドワーズは、地域的な宗教現象を、救済史という大きな枠組みの中に位置づけようとしたのである<sup>(57)</sup>。

#### D . 千年王国の切迫

エドワーズは自分の時代を、黙示録16章の「第6の鉢」のもとにあると見なした<sup>(58)</sup>。モーゼズ・ローマンの『黙示録の解釈と注解』の影響を受けてエドワーズは<sup>(59)</sup>、第5の鉢はすでに注がれ、第6の鉢が注がれるときは差し迫っていると信じたのである<sup>(60)</sup>。聖句の解釈と共に、大覚醒が大きな影響を及ぼしたであろうことは想像に難くない。聖霊の豊かな注ぎはまさに時を縮めて栄光の日の訪れを早めようとしておられると、エドワーズは確信を強めたであろう<sup>(61)</sup>。

いずれにせよエドワーズは、時の短さを繰り返し力説する：

神の偉大なみわざの開始は間近に違いない<sup>(62)</sup>。

反キリストを打ち倒して終わりの日の栄光を導き入れるところの、神の霊の輝かしいみわざの開始はそう遠いことではない<sup>(63)</sup>。

神の霊のみわざはまもなく始まる。それは前進して反キリストの王国を打ち倒し、遂には地上の目に見えるサタンの上の王国を滅ぼす<sup>(64)</sup>。

この第6の鉢の影響はすでに始まっているだけでなく、進行しつつある。この鉢は今、速やかに注がれつつある<sup>(65)</sup>。

またエドワーズは、獣による二人の証人の殺害（黙示録11章1 - 12節）を、宗教改革の時にすでに成就したと解釈する：「宗教改革において成就した出来事が、証人たちに関する説明に十分にあてはまる」<sup>(66)</sup>。したがって、これはもうすでに起きてしまったことだとして、終末の切迫に伴う恐れを除き去り、キリストの王国を拡大していくためのキリスト教徒の努力を奨励するのである<sup>(67)</sup>。

さらにエドワーズは、われわれは祈りによって、説教によって、そしてあらゆる伝道の働きによって、キリストの王国の到来を促進し、千年王国の到来を早めることができると信じる。

人間の尽力によって千年王国の到来は早められると、彼は自信に満ちて告げるのである<sup>(68)</sup>。ただし、ここでもまたエドワーズのバランス感覚が働く：

神の民は 良きしるしを見て 大いに活気づけられ励まされ、ますます熱心に、キリストの王国前進のために一致して祈り続けるであろう。しかし、この点に関するわれわれの期待がいかなるものであれ、時と時期は天父がご自分の権威をもってお定めになっていることで、われわれの知るところではないということに満足せねばならない。そして、神はご自分の時に応じて祈りに答え、輝かしいお約束を果たしてくださるということ、われわれは喜んで認めねばならない<sup>(69)</sup>。

### E. 牧会的配慮

ジョナサン・エドワーズは神学者であり哲学者であり作家であるが、しかし何よりもまず牧師であり説教者であった。したがって彼の終末論に含まれる牧会的側面を見逃してはならない。終末的希望は、もし正しく理解されるなら、いつの時代の誰にとっても、大きな慰め・励ましとなりうる。実際、エドワーズ自身も預言の研究によって励まされ支えられていた。ステインはエドワーズの「黙示録ノート」についてこう評する：

エドワーズだけがその時代の出来事に注目していた伝道者であったわけではないが、しかし彼が、非常に大きな個人的ストレスや混乱の年月、結局は牧師免職に至るあのノーサンプトン論争の時期を通じて、ずっと預言に関連した書き込みを熱心に続けていたこと、しかも当時の出来事にはなほ重大な意義を付与していたことに驚かされる。預言が成就しているという認識が、困難のまっただ中であってなにがしかの慰めを彼に与えたのではなからうか<sup>(70)</sup>。

この指摘は正しいであろう。終末論は牧会的な含みを持つ。エドワーズは歴史と預言の中に神の摂理を見た。ステインはこう要約する：

摂理という神学的概念を用いて、エドワーズは神が究極の目的を実現されるその力を然りと断言した。困難にもかかわらず、神の御目的は勝利するであろう。争いや敗北の時、聖徒たちには挫折感が生じるが、しかし摂理という事実に基づく信頼へと、遂には道を譲る。エドワーズによれば、黙示録の預言は、繰り返し起こる困難と最終的成功の両方を告げているのである<sup>(71)</sup>。

エドワーズにとって、終末論は空虚で思弁的な、あるいはセンセーショナルな教理などではなかった。実際的で牧会的な配慮に満ちた、真摯な営為にほかならなかったのである。

### エドワーズの終末論の影響

エドワーズの終末論がその後のアメリカにどのような影響を及ぼしたかについては、種々の



見解がある<sup>(72)</sup>。しかし次の3点に関しては、識者の見るところはほぼ一致している。

- i . 楽観的歴史観
- ii . アメリカの自己認識
- iii . 伝道活動の拡大<sup>(73)</sup>

事実エドワーズは、贖いのみわがが徐々に前進していくことを強調し、アメリカは神の計画の中で果たすべき重要な役割を与えられていると宣言し、キリストの王国の前進に向けて努力せよと同信の仲間たちに説いた。アメリカの歴史において、これら3つは密接につながり、大きな影響を与えてきた。

エドワーズの見方はアメリカの「シナリオ」になったとさえハイマートは主張する：

大覚醒後、千年王国の青写真となったのは エドワーズの『贖いの御業』であった。それがアメリカ社会のたどる道を余りにも精密に描いていたために、18世紀後半において、それはアメリカの社会と政治の歴史のシナリオとも呼ぶべきものとなった<sup>(74)</sup>。

「シナリオ」というのはやや誇大な表現に思えるが、しかし歴史と終末についてのエドワーズの見方が、当時のアメリカ人たちに楽観的な未来像を抱かせたことは確かである。千年王国のビジョンについての彼の描写を、ひとつだけ例として見ておこう：

その時全世界は平和と愛のうちに一つに結ばれ、一つの友好的な社会となる。地球のあらゆるところに住むすべての国民が心地よい調和のうちに共に結び合わされる。神の教会はどれも皆、互いに知識と霊的幸福を援助し増進する。通信手段もそうした目的のために世界中で用いられる。今は貪欲や誇りのゆえに 改良され邪悪で放埒な者たちによって使われている航海術が、その時には神にささげられ聖なる用途のために改良を加えられる。

そしてその時、人々が言葉のみならず博愛の行為によって互いに豊かに愛を表わす時代となるのである<sup>(75)</sup>。

世界平和、愛、調和、善のための技術の発展、満ちあふれる善意 。エドワーズの壮大でリアルな未来図は同時代のアメリカ人たちの心を捉えた。しかも彼によれば、新世界アメリカこそ明け初める神の栄光の日の舞台なのである。エドワーズの終末論、千年王国を歴史の発展の延長上に位置づけたこの楽観的な終末論が、「アメリカのユートピア主義の起動力」となったことは疑う余地がない<sup>(76)</sup>。

## 終わりに

ジョナサン・エドワーズの終末論に関する考察を終えるにあたり、彼の思想が現代に生きるわれわれにとってどのような意義を持つのか、そこを検討して結びとしたい。

まず、エドワーズは歴史の“意味”を発見したと言える。歴史は時の無意味な経過ではない。歴史の中で、キリストの王国は前進し、徐々にしかし着実に建設されていく。われわれの、日々の、普通の歴史にも意味がある。通常の歴史を超えた千年王国の到来ではなく、通常の歴

史の展開の中での千年王国樹立を言明したエドワーズの思想は、歴史の発見、歴史の意味の発見という意義を有すると考えられるのである。

次に、エドワーズにとって千年王国が究極の目標ではなかった。全体的な枠組みこそ重要であった。恵みを通しての神の摂理の働きこそが彼の最大関心事であった。千年王国は彼の終末論の一面にしかすぎず、そして彼の終末論もまた彼の救済史観の一面にすぎなかった。すべては神の贖いの大計画に包含される。それだから、シモンソンの言葉を借りるなら、「この壮大な目的のうちにあつて、偶然のものなど何ひとつなく、神の意志から離れたものなど何ひとつなく、意味のないことなど何ひとつない」<sup>(77)</sup>のである。エドワーズの終末論と歴史観は、われわれの視野を広げてくれるのではなからうか。

さらに、エドワーズの終末論の根底にあるのは、恐怖ではなく信頼であった。神の摂理への信頼と確信。聖書の終末論は本来そうしたもののものではないか。神との個人的で密接な関係に基づくものものではないか。そこから強い確信と希望が生じてくる。エドワーズの終末思想は、彼の他の神学思想と同様、「頭でなく心に抱かれた」<sup>(78)</sup>ものであった。

## 付 記

本研究にあたり「2002 平成14 年度 北陸大学特別研究助成金」の交付を受けた。記して謝意を表したい。

## 注

- (1) Barbara B. Oberg & Harry S. Stout eds., *Benjamin Franklin, Jonathan Edwards, and the Representation of American Culture* (NY: Oxford University Press, 1993); Daniel Walker Howe, *Making the American Self: Jonathan Edwards to Abraham Lincoln* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1997), pp. 21-47; 大西直樹「ジョナサン・エドワーズ ビューリタンの残光」(『週刊朝日百科・世界の文学32』[朝日新聞社, 2000] 42 - 45頁)等参照。
- (2) Perry Miller, *Errand Into the Wilderness* (Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 1956), 233.
- (3) G. C. Goen, "Jonathan Edwards: A New Departure in Eschatology," *Church History* 28 (1959): 25-40; Timothy P. Weber, *Living in the Shadow of the Second Coming: American Premillennialism, 1875-1982* (Chicago, IL: University of Chicago Press, 1987), 13; 野村文子「ジョナサン・エドワーズとミレニアリズム ヨハネの黙示録とアメリカ合衆国」(井門富二夫編『アメリカの宗教伝統と文化』[大明堂, 1992]), 167 - 184頁; Frederic J. Baumgartner, *Longing for the End: A History of Millennialism in Western Civilization* (NY: St. Martin's Press, 1999), 129ff.
- (4) Goen, 39; Baumgartner, 129.
- (5) Jonathan Edwards, *Apocalyptic Writings, The Works of Jonathan Edwards*, v. 5, ed. Stephen J. Stein (New Haven, CT: Yale University Press, 1977).
- (6) John H. Gerstner, "Jonathan Edwards: Insights That Shaped American Thought," *Fundamentalist Journal*, v. 4, n. 4 (1985): 44.
- (7) Stephen J. Stein, "Editor's Introduction" to *Apocalyptic Writings*, 77.
- (8) Stephen J. Stein, "A Notebook on the Apocalypse by Jonathan Edwards," *William and Mary Quarterly* 29 (1972): 631-2.
- (9) *Apocalyptic Writings*, 15, 440-3.
- (10) ステインによれば、扉には"1747"とあるが実際の発行年は1748年である(*Apocalyptic Writings*, 308, 85)。
- (11) この点については以下のものを参照されたい。田村秀夫編著『イギリス革命と千年王国』(同文館, 1990。特に田村秀夫「総括と展望 近代社会と千年王国論」[253 - 302頁]は簡潔にして包括的、要点を押えていて有益である); 岩井淳『千年王国を夢みた革命 17世紀英米のビューリタン』

- ( 講談社 , 1995 ) ; 田村秀夫編著 『千年王国論 イギリス革命思想の源流』( 研究社 , 2000 ) .
- ( 12 ) Stein, "Introduction," 4.
- ( 13 ) Ibid., 7. Peter Toon, "The Latter-Day Glory," in *Puritans, the Millennium and the Future of Israel: Puritan Eschatology 1600 to 1660*, ed. Peter Toon (Cambridge, UK: James Clarke & Co., 1970), 23-41をも参照。
- ( 14 ) これらの点に関しては以下のものを参照。Stein, "Introduction," 8-9; James West Davidson, *The Logic of Millennial Thought: Eighteenth-Century New England* (New Haven, CT: Yale University Press, 1977), 151; Sacvan Bercovitch, *The American Jeremiad* (Madison, WI: The University of Wisconsin Press, 1978), 93-7; Stephen J. Stein, "Transatlantic extensions: apocalyptic in early New England," in *The Apocalypse in English Reraissance thought and literature*, eds. C. A. Patrides & Joseph Wittreich (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1984), 266-98.
- ( 15 ) William J. Scheick, "The Grand Design: Jonathan Edwards' *History of the Work of Redemption*," *Eighteenth-Century Studies* 8 (1975): 305ff.
- ( 16 ) James P. Martin, *The Last Judgment in Protestant Theology from Orthodoxy to Ritshl* (Grand Rapids, MI: William B. Eerdmans, 1963), 78-99.
- ( 17 ) 大覚醒に関してはEdwin Scott Gaustad, *The Great Awakening in New England* (Gloucester, MA: Peter Smith, 1957)が今なお基準となる良書である。日本語のものでは児玉佳与子「ジョナサン・エドワーズと大いなるめざめ」( 大下尚一編 『講座・アメリカの文化 1 ] ビューリタニズムとアメリカ』[ 南雲堂 , 1969 ] 129 - 167頁 ) ; 大西直樹「ジョナサン・エドワーズと『大覚醒』」(『アメリカ研究』31 [ 1997 ] 1 - 17頁) 参照。
- ( 18 ) Ruth H. Bloch, *Visionary republic: Millennial themes in American thought, 1756-1800* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), 16; Davidson, 151; Bloch, 16.
- ( 19 ) Stein, "Introduction," 20.
- ( 20 ) 本稿 の C と を見られたい。
- ( 21 ) Jonathan Edwards, *A History of the Work of Redemption, Works of Jonathan Edwards*, v. 9, ed. John F. Wilson (New Haven, CT: Yale University Press, 1989), 144.
- ( 22 ) Ibid., 145
- ( 23 ) Davidson, 217
- ( 24 ) Stein, "Introduction," 52.
- ( 25 ) *The Works of Jonathan Edwards*, v, 1 (Edinburgh: The Banner of Truth Trust, 1834; reprint, 1990), 539-40参照。
- ( 26 ) *Works* (Yale ed.), 9: 434.
- ( 27 ) Ibid., 9: 435.
- ( 28 ) *Apocalyptic Writings, Works* (Yale ed.), 5: 410-11.
- ( 29 ) Davidson, 156.
- ( 30 ) Stein, "Introduction," 51.
- ( 31 ) H. Richard Niebuhr, *The Kingdom of God in America* (Harper & Row, 1937; reprint, Middletown, CT: Wesleyan University Press, 1988), 143.
- ( 32 ) Davidson, 217.
- ( 33 ) Stephen J. Stein, "Providence and Apocalypse in the Early Writings of Jonathan Edwards," *Early American Literature* 13 (1978/9): 263.
- ( 34 ) Patricia Wilson-Kastner, "Jonathan Edwards: History and the Covenant," *Andrews University Seminary Studies* 15 (1977): 205, 210.
- ( 35 ) *History of the Works of Redemption, Works* (Yale ed.), 9: 144-5.
- ( 36 ) John F. Wilson, "Jonathan Edwards as Historian," *Church History* 46 (1977): 15.
- ( 37 ) *History of the Work of Redemption, Works* (Yale ed.), 9: 460.
- ( 38 ) Wilson-Kastner, 215.
- ( 39 ) Gerald R. McDermott, "Jonathan Edwards, the City on a Hill, and the Redeemer Nation: Reappraisal," *American Presbyterian* 69 (1991): 34-5.
- ( 40 ) Harold P. Simonson, *Jonathan Edwards: Theologian of the Heart* (Michigan: William B. Eerdmans, 1974), 149-50.
- ( 41 ) Goen, 33.
- ( 42 ) *History of the Work of Redemption, Works* (Yale ed.), 9: 459.
- ( 43 ) "Notes on the Apocalypse," in *Apocalyptic Writings, Works* (Yale ed.), 5: 197.
- ( 44 ) Goen, 26; Ernest Lee Tuveson, *Redeemer Nation: The Idea of America's Millennial Role* (Chicago: The University of Chicago Press, 1968), 56.
- ( 45 ) Alan Heimert, *Religion and the American Mind: From the Great Awakening to the Revolution* (Cambridge: Harvard University Press, 1966), 62.

- (46) Ibid., 64.
- (47) Martin, 72.
- (48) Thomas A. Schafer, "The Role of Jonathan Edwards in American Religious History," *Encounter* 30 (1969): 219.
- (49) Bercovitch, 99-100.
- (50) Ibid., 100.
- (51) *Some Thoughts Concerning the Revival in New England*, in *The Works of Jonathan Edwards*, v. 4, *The Great Awakening*, ed. C. C. Goen (New Haven: Yale University Press, 1972), 353.
- (52) Ibid.
- (53) Ibid., 354.
- (54) Ibid., 358.
- (55) Michael J. Crawford, *Seasons of Grace: Colonial New England's Revival Tradition in Its British Context* (NY: Oxford University Press, 1991), 134.
- (56) Wilson-Kastner, 213.
- (57) Crawford, 132.
- (58) "Notes on the Apocalypse," in *Apocalyptic Writings*, 243-4等参照。
- (59) Stein, "Introduction," 55-9; Edwards, "Notes on the Apocalypse," *Works* (Yale ed.), 5: 219-52.
- (60) Stein, "Introduction," 59.
- (61) Davidson, 155参照。なおエドワーズは千年王国実現の時期を西暦2000年に置いていたと見られる(飯島徹「ジョナサン・エドワーズと西暦2000年 千年王国の到来時期の予測に関して」『アメリカ研究』16 [1982]: 222-30)。
- (62) *Some Thoughts*, *Works* (Yale ed.), 4: 353.
- (63) *Humble Attempt*, *Works* (Yale ed.), 5: 421.
- (64) Ibid., 5: 412
- (65) Ibid., 5: 424
- (66) Ibid., 5: 390
- (67) Goen, 30-2. Schafer, 219をも参照。
- (68) Heimert, 59参照。
- (69) *Humble Attempt*, *Works* (Yale ed.), 5: 436
- (70) Stein, "Introduction," 47.
- (71) Stein, "Providence and the Apocalypse," 264.
- (72) たとえば次のものなどを参照されたい。John F. Wilson, "History, Redemption, and the Millennium," in *Jonathan Edwards and the American Experience*, ed. by Nathan O. Hatch and Harry S. Stout (NY: Oxford University Press, 1988), 131-41; John F. Wilson, "Editor's Introduction," in Jonathan Edwards, *A History of the Work of Redemption*, *Works* (Yale ed.) 9: 90-4.
- (73) Dietrich Buss, "The Millennial Vision as Motive for Religious Benevolence and Reform: Timothy Dwight and the New England Evangelicals Reconsidered," *Fides et Historia* 16 (1983): 18-34参照。
- (74) Heimert, 98-9.
- (75) *History of the Work of Redemption*, *Works* (Yale ed.) 9: 483-4.
- (76) Goen, 38. なお, 大下尚一「『アメリカにおける神の国』再訪 アメリカの夢の宗教的次元」(『アメリカ研究』21 [1987]) 31頁; 大西直樹「ジョナサン・エドワーズと『大覚醒』」6, 13頁, 等参照。
- (77) Simonson, 148.
- (78) Ibid., 156.